

受付番号

## 留学・研究計画書

氏名 近藤 百世	留学機関名 テヘラン大学文学部歴史科
留学先国名 イラン	留学期間 西暦 2012年10月～2013年09月
研究テーマ ガージャール朝期におけるイラン都市の発展 -都市間比較を通して-	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本テーマは、歴史学の立場から、ガージャール朝期(1786-1925年)イランの都市間比較研究を通して当代の社会の変容の考察を試みるものである。これは、近代化前夜のイランにおける社会変化の具体的事例を示しそれらを比較することで、それぞれの都市の特色を明らかにし、その上で帰納法的にイランの都市における伝統的要素と近代的要素を考察していくことを目的としている。</p> <p>研究対象は、ガージャール朝の首都テヘラン、副都タブリーズそしてその中継都市ガズヴィーンであり、比較の主軸はガズヴィーンに置かれている。それは当地域が首都・副都双方の影響を受けて再発展しているにもかかわらず、その内部では水利施設の建造の集中という独自の発展を見せているためである。これは、中央と地方の関係の考察やイランにおける都市の独自性を具体的に提示する点で大きな意味があると考えている。</p> <p>対象期間はガージャール朝の成立から発展、衰退期に当たる第4代君主ナーセロッディーン・シャーの時代までの約100年間(1796-1896年)である。従来の研究では、王朝の外交的敗北や西洋列強への従属、近代化・体制改革政策の失敗等の全体的な動きが対象とされてきた。しかし申請者は、この時期の考察を総合的に行うためには、社会内部で起こった変化の内実を明らかにし、それが西洋近代化、ガージャール朝いずれの影響によるものなのかを明らかにしていく必要があると考えている。</p> <p>研究方法は、都市社会(ソフト)面を統治機構・政策、住民構成等の変化を文献研究によって描き出す一方で、都市構造(ハード)面についてもその建造物、境界線、道路等の変化を地図比較やフィールドワークによるトポグラフィ研究によって明らかにし、これらを総合的に考察するというものである。</p> <p>これらの研究を通し、本テーマではガージャール朝期の都市とそれ以前の都市との違いと変化の要因を明らかにしていく。そしてその変化を都市間で比較することで、曖昧な概念で括られる「ガージャール朝期の変化」の内実を示していきたいと考えている。</p> <p>本テーマの学術的な意義は次の2点である。まずイラン史研究全体への貢献である。研究全体において地方史研究は発展の望まれる分野であり、特にガズヴィーン史は比較的量が少なく申請者の研究にも貢献の余地がある。そしてガージャール朝期の地方都市に関する研究も、中央と地方の関係を明らかにする上で発展が望まれている分野である。2点目はソフトとハード両面を意識した研究方法が、都市研究の方法論の発展にも示唆を与えうる点である。</p> <p>そして本テーマの社会的な意義は次の2点である。まず現ガズヴィーン市への貢献が挙げられる。同市は現在歴史的建造物を利用した観光開発や地方史の編纂に力を入れている為、本テーマによる都市史の整理はこれに貢献できるだろう。また、ガージャール朝期の再評価や分析は、現在イラン社会で求められているガージャール朝から続く伝統の再評価の動きに貢献できると考えている。</p>	

# 成果報告書

記入日 2013 年 12 月 06 日

氏名 近藤 百世	留学先国名 イラン・イスラーム共和 国	所属機関 東北大学国際文化研究科
研究テーマ：ガージャール朝期におけるイラン都市の発展—都市間比較を通して—		
留学期間： 2012 年 10 月 ～ 2013 年 9 月		
<p>この度の留学における成果は次の5点である。まずはなんとといっても、現地研究者たちと多く交流することができ、研究についてのアドバイスをいただけたことである。特に受け入れ先であったテヘラン大学文学部歴史学科長のザンディーエ教授には、現地の研究雑誌の入手や研究者・研究所への紹介をしていただき、今後の研究活動の為の礎を築くことができた。また、研究対象都市であるガズヴィーンには居住先のテヘランから毎月通いつめ、現地研究者、新聞記者、郷土史研究家、観光局員との交流を深めることができた。彼らからは、許可なしに入れぬ建物の見学や編纂中の史料などを見せてもらうことができた。また、イスラーム宗教研究所兼図書館の室長アラブ博士とその助手の方々には、公私の別なく面倒を見ていただいた。特に入手しにくい資料入手の協力、図書館の閲覧室への出入りを自由にしていただいたことは、気苦労の絶えないイランでの研究生活の拠り所となった。それ以外には、テヘラン市内の本卸売り商人たちとやりとりを重ねる中で、新たな本の流通経路や入手方法などを知ることができたのも、二次的ではあるが、成果であると言える。</p> <p>2点目は史資料の収集である。主にテヘラン大学中央図書館とイラン国立図書館、ゴムなどの地方都市や現地ガズヴィーンでの資料収集を行った。ただ、残念なことに後述する大統領選挙に関する業務の行き詰まりのせいで、手続き関係が上手くいかず、十分な成果を持ち帰ることはできなかった。この点を補足するため、近いうちに短期の再渡航を検討中である。</p> <p>3点目は新たな知識の獲得である。テヘラン大学においてスィヤグ体という古い文字の解読の授業を受講し、完全ではないが、ガージャール朝時代を研究する上で重要となるスキルを身につける機会を得た。また、同大学の教授・学生たちと交流することにより、現地における歴史学の位置づけや、同国内で主流とされている思考パターン、歴史的事柄への解釈や関心などを体感することができた。</p> <p>4点目はペルシア語運用能力の向上である。この度、受け入れ先であるテヘラン大学文学部の授業に加え、前回の留学でも通学したロガトナーメ・デフホダー校の授業も受講し、上級Ⅱクラス（最終クラス）を修了した上で、習字や会話のクラスも受講した。前者では同大学で行われる授業・シンポジウムの受講や講師・学生との積極的交流を通して、アカデミック・タームを中心にペルシア語への知識を深めた。日常生活では獲得することのできない部分の能力を高められたことが、ここにおける一番の成果と言える。後者では、日常会話の運用能力の向上はもちろんのこと、留学中の研究者たちと知り合い、</p>		

彼らから欧米の最新の研究事情・方法を指南してもらえたことは、報告者のこれからの大きな影響を与えてくれるだろう。また、ここでの会話が全てペルシア語で行われたことも一つの成果と言えるだろう。

また5点目として、報告者は研究対象のガズヴィーン以外に、比較検討の対象であるタブリーズやヤズド、カーシャーンなどへ足を運び、また、建造物の比較という点で注目しているソルターニーエ、ナーイーン、エスファハーン、ゴム、マシュハドといった様々な都市を訪ねる機会を得たことも大きな成果だった。そこでは文献や写真集でしか見ることの叶わなかった建造物を目の当たりにすることが出来、細部の造りの違いや都市の中での位置、全体の調和といった点まで把握する貴重な機会を得た。また、8月のラマザン期間中にはトルコのイスタンブールを訪れ、イランとトルコの建造物の違いと共に、両地域の断食や生活習慣、嗜好の違いなども目の当たりにすることができた。

国内での生活については、イラン大統領選挙を始め、アーシューラー（イマーム・ホセイン殉教の追悼行事）やノウルーズ（年賀行事）といった、イランの変革及びシーア派行事、イラン独自の祭を体験できたことが良い経験となった。特に前者はこの前後、滞在許可申請のない外国人留学生のほとんどが国外退去を余儀なくされ、報告者自身（許可を獲得済）も約2ヶ月の自由な外出がままならないという特殊な状況下の中、イランの社会変化を目の当たりにすることができたことは、一生の思い出である。この間、イランにおけるほとんどの手続き業務が滞り、研究活動が出来ない状況にあり苦労もしたが、街での人々の様子、候補者たちの演説の様などを見ることができたのは大変興味深かった。

イランの政情不安の煽りを受けた治安の悪化や通信規制、物価の異常な上昇にも随分と苦しめられた。特に物価は、報告者の滞在中にも3倍以上も跳ね上がって生活を圧迫した。また、施設利用料や滞在費、見学料に外国人値段が設定されたことで（イラン人の3倍～10倍）、調査や滞在に大きな支障がでた。交渉次第で多少の減額は可能ではあったが、それでも研究費のための資金繰りのために、日々の生活を切り詰めざるを得なかった。

通信の規制に関してはかなり辛い状況におかれた。電話、メール、インターネット通信全ての手段において日本との通信がままならなくなってしまった上、原因不明の事故により、収集中のデータ、論文執筆データなどが3回に渡り全壊してしまう悲劇にも見舞われた。

生活面ではこのような不自由が多々あったが、人々との交流という面ではポジティブな成果が多くあった。特に多くの友人を得て人々とのつながりをもてたことは、今後の研究活動だけでなく草の根的な国際交流の意味でも良い成果であったと思われる。また、報告者は特にインテリ層との交流を望んだため、年齢層が比較的高めな人々の集まるお茶会や交流会に参加した。中でもイラン人思想家の著作講読会への参加は大きな恩恵をもたらした。思想関係の難しい文献を読みこなせるようになっただけでなく、多くの知己を得ることができた。彼らからは勉強会でのサポート以外にも、旅行やパーティー、祭り、冠婚葬祭などに招待してもらい、現地イラン人の生活を経験させてもらうことができた。

貴重な体験を通してこれらの成果を得ることができたのは、ひとえに松下幸之助国際スカラシップ様のご助力あってのことである。貴財団様の多大なるご支援のおかげで、研究発展のための基盤を作り、次を見据えるための糸口を得、視野を広げることができた。紙面を借りて感謝申し上げたい。

<写真>



ガズヴィーンのシャーフザーデ・ホセイン廟の外門  
(2013年3月14日報告者撮影)



郷土史研究家のヌールモハンマディー氏(右)と  
(2013年8月18日同行者撮影)



デフホダー校の友人らのフェアウェル・パーティー  
(2013年2月24日友人による撮影)



レイのシャーフ・アブドゥル・アズィーム廟内部  
(2013年4月1日報告者撮影)